

夏 秋 ト マ ト の 晩 播 栽 培 法

阿 部 隆・吉 池 貞 蔵・高 橋 慶 一

(岩手県園芸試験場)

Method of Late Sowing Culture of Tomatoes for Summer and Autumn Crop in Open-Field

Takashi ABE, Teizō YOSHIKAKE and Keiichi TAKAHASHI

(Iwate Horticultural Experiment Station)

1 は し が き

岩手県における夏秋トマトの収穫期間は、7月中旬から10月上旬頃までと比較的長期間にわたるが、収量的には、その大半が7、8月に集中し、9月以降の品質、収量は著しく低下する。そのため、これまで生育後期の生産力向上をはかるため、雨よけ栽培法や側枝果房利用栽培等について報告してきた。本研究は無加温のパイプハウス利用で、更に収穫期が遅い10月どりを中心とした作型の確立をはかったものである。

この栽培法の確立により、作型組合せによる収穫期間の延長と収穫作業の集中回避、更にパイプハウスの利用体系上でもその有利性は大きいものと思われる。

2 試 験 方 法

(1) パイプハウス被覆時期

パイプハウスの被覆開始時期を、昭和54年は8月5日、9月15日、55年は8月25日、9月15日とし、収穫終了時の11月上旬まで被覆した。摘心段位を54年は2、3段摘心、55年は更に4段摘心区を加えて被覆時期と摘心段位との関係について検討した。

(2) 播種期と摘心段位

昭和54、55年の播種期は6月5日、15日、25日播きとし、56年は更に5月25日区を加えた。摘心段位は54年2、3段摘心、55、56年はこれに4段摘心区を加え、播種期と摘心段位について検討した。

(3) 定植時の苗齢と品質、収量

定植時の苗齢として、4枚、6枚、それに慣行の8枚展葉苗区を設定した。播種期は6月15日播きで、定植期はそれぞれ7月14日、7月21日、8月31日であった。

なおいずれの試験でも、供試品種は54年「強力米寿」、55、56年は「あづき」である。栽植様式はうね幅130～150cm、株間25cm、2条植とし、1区40株の2～3区制で実施した。

3 試 験 結 果

この試験を開始した昭和54年の気象経過は、全般に日照

量も多く、しかも収穫期の10月の気温が平年より2～3℃も高かった。そのため全般に収量は高かったものの、裂果が多発した。しかし、55、56年は逆に異常低温、寡日照で経過したため、裂果の発生は少なかったが、着果率、果実肥大が低下し、未着色果也多発した。

これら障害果の軽減と収穫期間の延長を主なねらいとして、パイプハウスの被覆時期について検討した。

被覆方法は9月下旬まで屋根部のみ被覆し、最低温度が10℃を下回る10月以降はサイドビニールを下げ保温をはかった。

この結果、パイプハウス被覆による裂果軽減効果は顕著で、54年は露地の裂果発生率が57%であったのに対し、被覆区は5%前後と著しく低かった。また55年は前述の気象条件下で未着色果が多発したが、ハウス被覆により未収穫果が著しく軽減され、両年ともハウス被覆による増収効果が著しかった。

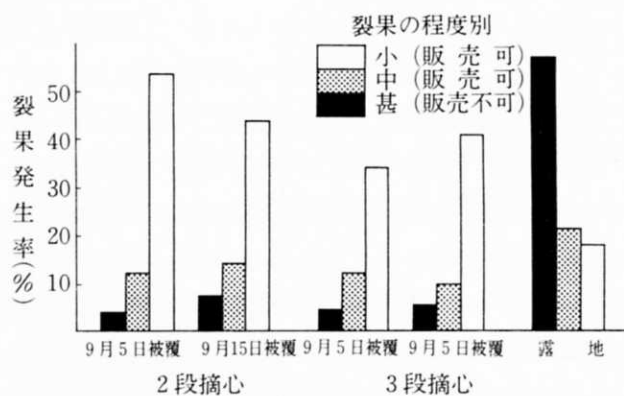


図1 被覆時期、摘心段位と裂果発生率(54年)

しかし、被覆時期と品質、収量の関係については一定の傾向は認められず、植付時期から収穫始めまで、かなり被覆開始時期の幅があるものと推察される。

次に、播種期と摘心段位との関係では、播種期が収量に及ぼす影響が大きく、早い播種期の5月下旬～6月上旬播きで比較的収量は安定したが、6月15日以降に播種した区は着果率の低下に伴い著しく収量が低下した。

この収量が安定した5月下旬～6月上旬播きで、摘心段位と収量との関係をみると、全般に3～4段摘心がまさる傾向がみられるが、販売面で安定してくる後期収量は4段摘

心区でややまさる傾向を示した。

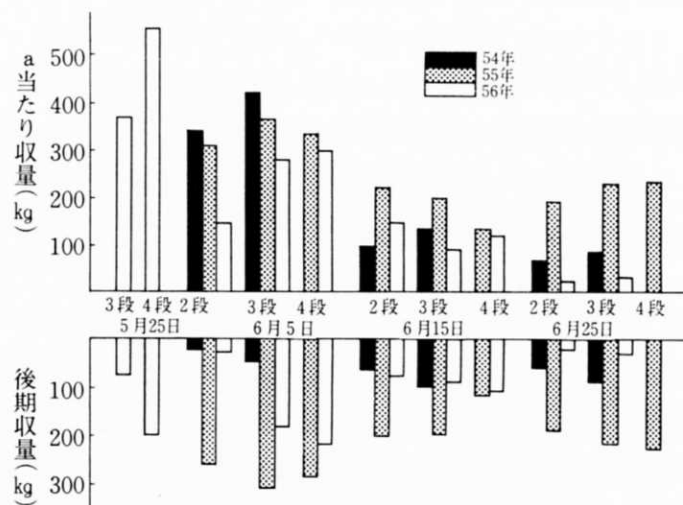


図2 播種期、摘心段位と収量
及び後期収量(10月以降)

播種期と摘心段位の違いによる品質の処理間差は明らか

表1 定植時の苗齢と収量

(30株当たり)

苗 齢	良 果		格 外 果		合 計		1 果 平均重 (g)	障 害 果 (個)			a 当たり 収 量 (kg)
	個 数 (個)	重 量 (kg)	個 数 (個)	重 量 (kg)	個 数 (個)	重 量 (kg)		変形果	病 果	裂 果	
4 枚 苗 区	120.1	20.0	22.1	2.1	142.2	22.1	155	26.5	14.2	1.0	355
6 枚 苗 区	70.4	12.2	22.9	2.0	93.3	14.2	152	31.9	17.6	0.3	216
慣 行 区	28.1	4.9	16.0	1.2	44.1	6.1	137	5.1	20.8	0	87

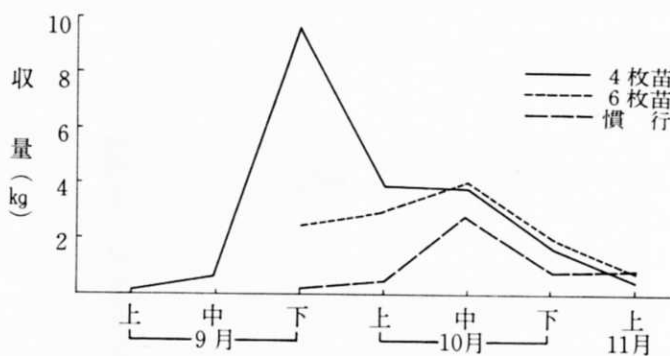


図3 定植時の苗齢と時期別収量

4 ま と め

全般に生産量が低下し、販売面では比較的安定してくる

でなかったが、早い播種期でやや変形果が多い傾向がみられた。

また、この作型の花芽分化期から開花、結実期にかけては、高温条件下で経過することが多く、苗が軟弱徒長しやすく着果率が低下しやすい傾向がある。

そのため、若齢苗定植の効果について検討したところ、若齢苗区は草丈が低く、茎もやや太く、着果率は著しく向上した。これに伴い若齢苗による増収効果は大きく、慣行苗(本葉8枚展開、第1花房の第1花開花苗)に比較し、4枚、6枚苗区の収量比はそれぞれ408、248%であった。

4枚苗区は特に1段果房の着果率がすぐれ、これに伴う初期収量も高かったが、10月中旬以降の後期収量は6枚苗区がややまさった。

苗齢と障害果発生との関係では、若齢苗区で明らかに変形果が多かったが、その他、病害果、裂果等に差はなかった。

9月下旬～11月上旬どりをねらいとした、夏秋トマトの晩播栽培法について検討した。

この作型は気象変動の激しい時期の栽培のため、苗が軟弱徒長しやすく、しかも障害果の多発や着果率が低下しやすい等の栽培上の問題点も多い。

このためパイプハウスの被覆効果、播種期、苗齢等について検討した結果、障害果軽減のための被覆効果は大きく、播種期も5月下旬～6月上旬ごろに適期がみられた。またこの播種期での摘心段位は4段でよく、定植時の苗齢は4～5枚程度の若齢苗でよいものと判断された。

なおこの作型はアブラムシによるウイルス感染が起こりやすいため、育苗期は寒冷紗等で被覆する必要がある。